

令和3年 1月12日

全中理役員会

全国中学校理科教育研究会・会長

山口 晃弘

(品川区立八潮学園・校長)

## 1人1台の端末が児童生徒の手元にある理科の授業

この原稿を書いている1月現在、新型コロナ・ウィルスによる影響は好転したとは言い難い状況が続いている。「感染力が増した変異種が広まっている」「ワクチンには副作用がある」「緊急事態宣言が常態化する」など、よくない情報は後を絶たない。諸外国の中には再び外出禁止を始めたところも出てきており、我が国も同じ状況にならないことを願うばかりである。

学校は再開されてはいるが、児童生徒はもちろん教員もマスクは常用で、教室には「冷たくても手洗い、寒くても換気」と標語が掲げられている。コロナ禍の収束は見通せない、とあって立ち止まって「学び」を止めるわけにはいかない。

実際、私の学校でも「学級閉鎖でも何とかする」という手応えが実感としてある。不慣れで戸惑いがちだったオンライン授業も、「やらざるを得ない」状況に追い込まれると、いつの間にか YouTube や Zoom が日常会話で飛び交っている。その事態を乗り越えた教員集団は自信さえもつにさえ至っている。それどころか、若い教員が中心となり自主勉強会を立ち上げている。そこでは、「オンラインでの双方向性をふだんの授業に生かしたい」「ハイブリッド型授業や反転学習をしたい」などという前向きな発想があり、熱気さえ感じる。むしろ、コロナ対応の取り組みが常態化されることが前提となって、「学校の新しい生活様式」が定着しようとしている。自治体、学校、教職員、教育関係の機関などの英知や工夫、努力などによって、様々な学習の工夫がなされている現状がある。

今後、令和3年度には大部分の学校で児童生徒の手元に1人1台の端末がある。それぞれの自治体で前倒しに実施が進められている「GIGA スクール構想」は、皮肉な話したが、新型コロナ・ウィルスの感染拡大が追い風になって、一気に進む形になっている。政府が進める「児童・生徒1人1人に個別最適化され、創造性を育む教育 ICT 環境」は、今後、自然に根付いて広まるのは間違いない。

教員も児童生徒も新たな学習の可能性に気付き始めている。1人1台の端末が児童生徒の手元にある理科の授業。これが、これからはばらく学校の新しいトレンドになる。今後の理科の授業の実践の方向性を期待や希望をもって見守り、応援したい。